

## 育児に関する調査

—母の年齢及び学歴との関係—

研究第2部 高野 陽  
佐久間 治子

### I 緒 言

育児はこどもの発育・発達を促し、それを正しい方向に導き、身体面、精神面の健康の維持と増進を計り、更にこどもを将来社会に役立つ人間に形成することにあるという理念はいつの世においても不変のものであろう。しかし、社会に役立つという点は時代によりその社会構造によって異なり、それにより育児の目標ができあがるようである。それでは現代の育児はどのような形態になっているかを理解するために今回の調査を企画した。

現代は急速に都市化の波が押し寄せ、都市への人口の集中がみられる一方、地方においては過疎が進んで都会にも地方にも大きな社会問題が発生しているが、これが

当然のように小児の健康と福祉をめぐる種々の条件をも悪くしている。また、家庭においては、全国児童家庭調査報告書<sup>1)</sup>にみられるように核家族が増加し、児童の数が減少している。1963年2.3人、1964年2.0人、1969年1.8人という結果に示されるように一家庭の児童数の減少は著明である。このように育児環境に変化が現われてきているわけであるが、その中における母親の育児に対する考え方を調べ、よりよい乳幼児保健指導の一助としたいと思う。

この見地に立ち、大都会に住む母にアンケート調査を行ない、その成績を報告する。

### II 調査対象と方法

対象は、愛育病院保健指導部にその児を受診させている母親、東京都渋谷保健所管内、川崎市御幸保健所管内に住む母親である。これらの母親は各地域とも生後3か月の第1子を養育しているものである。これらの母親に対して、自分の児についての心配点、栄養、疾病、育児についての問題をあげたアンケート用紙を配布した。配布は、渋谷と川崎はそれぞれの保健所の実施する3か月児検診受診日に行ない、翌々日ツベルクリン反応判定日に回収した。また愛育群は受診日に配布回収した。

各地域の主なる特徴は前報<sup>2)</sup>に示したが、渋谷群は一般に経済的にも恵まれており、住民の衛生知識も高く地

域内の医療施設も官公立、私立の病院、診療所をはじめかなり充実している。なお管理人口は約28万人である。川崎群は昭和42年に設立された保健所であつては川崎市中央保健所の所轄で、管理人口は約10万4000人で、地域は東京都、横浜市、川崎市中原地区に接している。住民の大部分は給料生活者で、その70%は民間賃貸アパートに住み、その65%は6畳1間に住んでおり、団地住いとい戸建の家に住んでいる人は合わせて15%にすぎない。地域の医療施設は官私立の総合病院はなく診療所が主体をなしている。

### III 調査成績

#### 1. 母の年齢との関係

##### (1) 母の年齢分布

第1表に示した如く、川崎群が若く、渋谷群はそれよりやや年長、愛育群はその中間である。川崎群に19才以下のものが5人(2.3%)あり、20代の母は川崎群88.2%

愛育群84.5%、渋谷群83.0%となっている。

##### (2) 母の年齢と栄養法

現在の栄養法との関係を第2表に示した。各年齢群とも人工栄養が最も多くなっている。今の栄養法を選ぶにあたって「自分の考えだけで決めた」というものが各年齢群とも35~45%を占めるが、相談相手として選んだも

第1表 母の年齢分布

( )内%、以下同じ

	～19才	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40才～	計
渋谷	2(0.6)	90(26.3)	194(56.7)	44(12.9)	11(3.2)	1(0.3)	342(100.0)
川崎	5(2.3)	78(35.1)	118(53.1)	15(6.8)	4(1.8)	2(0.9)	222(100.0)
愛育	1(0.9)	38(30.5)	97(54.0)	15(12.2)	3(2.4)	0(—)	124(100.0)
計	8(1.2)	206(30.0)	379(55.1)	74(10.7)	18(2.6)	3(0.4)	688(100.0)

渋谷：東京都渋谷保健所管内  
川崎：川崎市御幸保健所管内  
愛育：愛育病院保健指導部受診者

第2表 母の年齢と栄養方法

	～19才	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40才～	計	
渋谷	母乳	1	27(31.8)	53(27.5)	7(15.9)	4(36.4)	1	93(27.4)
	混合	1	20(22.7)	42(21.8)	12(27.3)	1(9.1)	0	76(22.4)
	人工	0	41(46.5)	98(50.7)	25(56.8)	6(54.5)	0	170(22.4)
	計	2	88(100.0)	193(100.0)	44(100.0)	11(100.0)	1	339(100.0)
川崎	母乳	1	23(29.5)	26(22.0)	2(13.3)	2	1	55(24.8)
	混合	1	18(23.1)	22(18.6)	4(26.7)	1	0	46(20.7)
	人工	3	37(47.4)	70(59.4)	9(60.0)	1	1	121(54.5)
	計	5	78(100.0)	118(100.0)	15(100.0)	4	2	222(100.0)
愛育	母乳	1	9(23.6)	21(31.4)	3(20.0)	1	0	35(28.2)
	混合	0	11(29.0)	18(26.8)	4(26.8)	0	0	33(26.6)
	人工	0	18(47.4)	28(41.8)	8(53.3)	2	0	56(45.2)
	計	1	38(100.0)	67(100.0)	15(100.0)	3	0	124(100.0)
総計	母乳	3	59(28.9)	100(26.5)	12(16.2)	7(38.9)	2	183(26.7)
	混合	2	49(24.0)	82(21.7)	20(27.0)	2(11.1)	0	155(22.6)
	人工	3	96(47.1)	196(51.8)	42(56.8)	9(50.5)	1	347(50.7)
	計	8	204(100.0)	378(100.0)	74(100.0)	18(100.0)	3	685(100.0)

のでは医師が最も多く次いで保健婦・助産婦である。これは年齢が長ずるにつれ増加している。

(3) 児の体格の評価

母親が各自のこどもの体格をどのように評価しているかについて調べた。各年齢群とも体格が「普通」と答えたものが最も多いが、年齢が長ずるにつれて「大きい」と判断しているものの割合が多くなる。

母親の判断と計測値との一致度は、母の年齢が増す程低くなる傾向にあり、母が「大きい」と評価しているものでは実測によると「普通」に入るものが多く、母が「小さい」と答えているものはほぼ一致している。実測値の比較は、昭和43年度東京都乳幼児発育状況調査成績<sup>2)</sup>によった。

(4) 育児書

最近の育児書といわれるものの出版は著しいものがあり、この育児書の氾濫の中で母親は如何に育児書を利用してしているかを調べた。

育児書の年齢別所有率を第4表に示した。各年齢群とも「持っている」と答えたものが多く、25～29才群が最も多く、30才以上になると育児書をもっているものの割合が減少する。育児書の入手方法と時期については第5表に示した。「自分で選んだ」ものが各年齢群とも多いが、若年の母ほど「他人に選んでもらった」というものの割合が多くなっていく。特に川崎ではその傾向が強い。入手時期については、分娩前と分娩後に分けて検討したが、各年齢群とも分娩前に既に所持しているが、その割

高野・佐久間：育児に関する調査  
第3表 母の年齢と児の体格の評価

		～19才	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40才～	計
渋谷	大きい	1	29(33.0)	67(34.7)	21(50.0)	6(60.2)	1	125(37.2)
	普通	1	50(56.8)	107(55.4)	21(50.0)	3(30.0)	0	182(54.2)
	小さい	0	9(10.2)	19(9.9)	0(—)	1(10.0)	1	29(8.6)
	計	2	88(100.0)	193(100.0)	42(100.0)	10(100.0)	1	336(100.0)
川崎	大きい	1	24(32.0)	47(39.8)	9(60.0)	2	0	83(37.9)
	普通	2	43(57.3)	56(47.5)	4(26.7)	2	1	108(49.3)
	小さい	2	8(10.7)	15(12.7)	2(13.3)	0	1	28(12.8)
	計	5	75(100.0)	118(100.0)	15(100.0)	4	2	219(100.0)
愛育	大きい	1	13(36.1)	25(37.3)	3(23.1)	0	0	42(35.3)
	普通	0	20(55.6)	38(56.7)	10(76.9)	2	0	70(58.8)
	小さい	0	3(8.3)	4(6.0)	0(—)	0	0	7(5.9)
	計	1	36(100.0)	67(100.0)	13(100.0)	2	0	119(100.0)
総計	大きい	3	66(33.2)	139(36.8)	33(47.1)	8(50.0)	1	250(37.1)
	普通	3	113(56.8)	201(53.2)	35(50.0)	7(43.8)	1	360(53.4)
	小さい	2	20(10.0)	38(10.0)	2(2.9)	1(6.2)	1	64(9.5)
	計	8	199(100.0)	378(100.0)	70(100.0)	16(100.0)	3	674(100.0)

第4表 母の年齢と育児書の普及

		～19才	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40才～	計
渋谷	持っている	1	62(69.7)	152(78.4)	28(63.6)	6(54.5)	0	249(73.0)
	持っていない	1	27(30.3)	42(21.6)	16(36.4)	5(45.5)	1	92(27.0)
	計	2	89(100.0)	194(100.0)	44(100.0)	11(100.0)	1	341(100.0)
川崎	持っている	3	45(55.7)	79(66.9)	7(46.7)	2	0	136(61.3)
	持っていない	2	33(42.3)	39(33.1)	8(53.3)	2	2	86(38.7)
	計	5	78(100.0)	118(100.0)	15(100.0)	4	2	222(100.0)
愛育	持っている	1	25(65.8)	49(73.1)	12(80.0)	1	0	88(71.0)
	持っていない	0	13(34.2)	18(26.9)	3(20.0)	2	0	36(29.0)
	計	1	38(100.0)	67(100.0)	15(100.0)	3	0	124(100.0)
総計	持っている	5(62.5)	132(64.4)	280(73.9)	47(63.5)	9(50.0)	0	473(68.9)
	持っていない	3(37.5)	73(35.6)	99(26.1)	27(36.5)	9(50.0)	3	214(31.1)
	計	8(100.0)	205(100.0)	379(100.0)	74(100.0)	18(100.0)	3	687(100.0)

合も高令になるほど高くなる。第6表は育児書の利害についての結果であるが、「役に立つ」と答えたものが95.1%あり、母親にとっては育児書はなくてはならぬものようである。その役に立つ理由は、主として「こどもが標準通りの発育をしているかどうかを調べることができた」、「病気の状態を知ることができた」、「心配な時に読んで安心できた」などであり、この理由については年齢の差はない。また、育児書を持たぬ母に対して、その所有しない理由を尋ねたところ、「医師や保健婦に相

談する」と答えたものが最も多く、育児書は医師、保健婦の代理であり、医師や保健婦は育児書の代用品であるかの感を受ける。

(6) 年寄りとの同居について

核家族が増加していることは先にも述べたが、身近かにいて育児について意見を述べる人がいないことが、母にとってどのような気持を与えているかを知る一つの手段として、「育児のために年寄りとの同居を希望するか」と質問した。対象のうち愛育群71.5%、渋谷群76.5

第5表 母の年令と育児書の入手方法と時期

			～19才	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40才～	計
波 谷	入手方法	自分で	人 (%)	44(68.8)	109(67.7)	23(76.7)	5(83.3)		181(69.3)
		他人から		20(31.2)	52(32.3)	7(23.3)	1(16.7)	80(30.7)	
				64(100.0)	161(100.0)	30(100.0)	6(100.0)		261(100.0)
谷	入手時期	出産前		46(68.7)	103(62.4)	23(76.7)	5(84.3)		177(66.0)
		出産後		21(31.3)	62(37.6)	7(23.3)	1(16.7)	91(34.0)	
				67(100.0)	165(100.0)	30(100.0)	6(100.0)		268(100.0)
川	入手方法	自分で	1	30(73.2)	45(61.6)	3(50.0)	1		80(64.5)
		他人から	2	11(26.8)	28(38.4)	3(50.0)	0	44(35.5)	
			3	41(100.0)	73(100.0)	6(100.0)	1		124(100.0)
崎	入手時期	出産前	0	29(72.5)	51(69.9)	5(83.3)	1		86(69.9)
		出産後	3	11(27.5)	22(30.1)	1(16.7)	0	37(30.1)	
			3	40(100.0)	73(100.0)	6(100.0)	0		123(100.0)
愛	入手方法	自分で	1	16(66.7)	35(76.1)	8(66.7)	1		61(72.6)
		他人から	0	8(33.3)	11(23.9)	4(33.3)	0	23(27.4)	
			1	24(100.0)	46(100.0)	12(100.0)	1		84(100.0)
育	入手時期	出産前	1	17(68.0)	32(66.7)	10(83.3)	0		60(69.8)
		出産後	0	8(32.0)	16(33.3)	2(16.7)	0	26(30.2)	
			1	25(100.0)	48(100.0)	12(100.0)	0		86(100.0)
総	入手方法	自分で	2	90(69.8)	189(67.5)	34(70.8)	7(87.5)		322(68.7)
		他人から	2	39(30.2)	91(32.5)	14(29.2)	1(12.5)	147(31.3)	
			4	129(100.0)	280(100.0)	48(100.0)	8(100.0)		469(100.0)
計	入手時期	出産前	1	92(69.7)	186(65.0)	38(79.2)	6(85.7)		323(67.7)
		出産後	3	40(30.3)	100(35.0)	10(20.8)	1(14.3)	154(32.3)	
			4	132(100.0)	286(100.0)	48(100.0)	7(100.0)		477(100.0)

第6表 母の年令と育児書の利害

			～19才	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40才～	計
波 谷	無益 有益 計	人 0 (%)		4( 6.7)	8( 5.6)	1( 4.5)	0		13( 5.7)
			0	56(93.3)	135(94.4)	21(95.5)	5	217(94.3)	
			0	60(100.0)	143(100.0)	22(100.0)	5		230(100.0)
川 崎	無益 有益 計	1		0( —)	5( 6.8)	0	0		6( 5.0)
		2		35(100.0)	68(93.2)	7	2	114(95.0)	
			3	35(100.0)	73(100.0)	7	7		120(100.0)
愛 育	無益 有益 計	0		0( —)	2( 4.7)	0	0		2( 2.6)
		1		24(100.0)	41(95.3)	9	0	75(97.4)	
			1	24(100.0)	43(100.0)	9	0		77(100.0)
総 計	無益 有益 計	1		4( 3.4)	15( 5.8)	1( 2.6)	0		21( 4.9)
		3		115(96.6)	244(94.2)	37(97.4)	7	406(95.1)	
			4	119(100.0)	259(100.0)	38(100.0)	7		427(100.0)

高野・佐久間：育児に関する調査

第7表 母の年令と同居希望の有無（現在同居していないものについて）

		～19才	20～24才	25～29才	30～34才	35～39才	40才～	計
渋谷	希望する	人	20(38.5)	58(43.3)	12(48.0)	5(62.5)		95(43.4)
	希望しない	(%)	32(61.5)	76(56.7)	13(52.0)	3(37.5)		124(56.6)
	計		52(100.0)	134(100.0)	25(100.0)	8(100.0)		219(100.0)
川崎	希望する	0	24(30.8)	27(43.5)	7(58.3)	2	1	61(37.9)
	希望しない	4	54(69.2)	35(56.5)	5(41.7)	2	0	100(62.1)
	計	4	78(100.0)	62(100.0)	12(100.0)	4	1	161(100.0)
愛育	希望する	1	4(19.0)	24(42.9)	6(54.5)	0		35(38.9)
	希望しない	0	17(81.0)	32(57.1)	5(45.5)	1		55(61.1)
	計	1	21(100.0)	56(100.0)	11(100.0)	1		90(100.0)
総計	希望する	1	48(31.8)	109(43.3)	25(52.1)	9(53.9)	1	191(40.6)
	希望しない	4	103(68.2)	143(56.7)	23(47.9)	6(46.2)	0	279(59.4)
	計	5	151(100.0)	252(100.0)	48(100.0)	13(100.0)	1	470(100.0)

第8表 母の学歴の分布

		大	学	高	校	中	学	計
渋谷	人	56	(16.7)	204	(61.4)	73	(21.9)	333 (100.0)
	%							
川崎	人	9	(4.4)	103	(50.0)	94	(45.6)	206 (100.0)
	%							
愛育	人	68	(49.6)	59	(43.1)	10	(7.3)	137 (100.0)
	%							
計		133	(19.7)	366	(54.1)	177	(26.2)	676 (100.0)

第9表 栄養法

		学	歴	母	乳	混	合	人	工	計
渋谷	人	15	(27.3)	10	(18.2)	30	(54.5)	55	(100.0)	
	%									
	学校	52	(25.5)	44	(21.6)	108	(52.9)	204	(100.0)	
川崎	人	2	(22.2)	1	(11.1)	6	(66.7)	9	(100.0)	
	%									
	学校	21	(20.4)	25	(24.3)	57	(54.3)	103	(100.0)	
愛育	人	29	(30.9)	15	(15.9)	50	(53.2)	94	(100.0)	
	%									
	学校	14	(20.6)	19	(27.9)	35	(51.5)	68	(100.0)	
計	人	18	(30.5)	15	(25.4)	26	(44.1)	59	(100.0)	
	%									
	学校	2	(20.0)	0	(—)	8	(80.0)	10	(100.0)	
計	人	31	(23.5)	30	(22.7)	71	(53.8)	132	(100.0)	
	%									
	学校	91	(24.9)	84	(22.9)	191	(52.2)	366	(100.0)	
計	人	54	(31.0)	36	(20.7)	84	(48.3)	174	(100.0)	
	%									

%、川崎群88.4%がいわゆる核家族であり、全国調査の傾向にある。

54.3%に比してはるかに高率である。第7表にその結果を示したが、約40%のものが希望しているだけであり、「希望するもの」は、年令が長ずるにつれて増加している

2. 母の学歴との関係

(1) 母の学歴の分布

第10表 栄養法の選択

		大 学		高 校		中 学	
渋谷	自分の考えで	34人	(60.9)%	90	(47.4)	25	(37.3)
	医師に相談	14	(25.0)	59	(31.1)	22	(32.8)
	保健婦・助産婦に相談	4	(7.1)	25	(13.2)	10	(14.9)
	知人に相談	0	(—)	0	(—)	4	(6.0)
	家族に相談	2	(3.5)	15	(7.9)	5	(7.5)
その他	2	(3.5)	1	(0.4)	1	(1.5)	
川崎	自分の考えで	6	(75.0)	46	(47.3)	35	(47.9)
	医師に相談	2	(25.0)	28	(28.9)	17	(23.3)
	保健婦・助産婦に相談	0	(—)	15	(15.5)	12	(16.4)
	知人に相談	0	(—)	0	(—)	1	(1.4)
	家族に相談	0	(—)	6	(6.2)	8	(11.0)
その他	0	(—)	2	(2.1)	0	(—)	
愛育	自分の考えで	36	(60.0)	29	(55.7)	4	(50.0)
	医師に相談	18	(30.0)	12	(23.1)	2	(25.0)
	保健婦・助産婦に相談	1	(1.6)	4	(7.7)	0	(—)
	知人に相談	1	(1.6)	0	(—)	0	(—)
	家族に相談	3	(5.0)	7	(13.5)	2	(25.0)
その他	1	(1.6)	0	(—)	0	(—)	
計	自分の考えで	76	(61.4)	165	(48.6)	64	(48.2)
	医師に相談	34	(27.4)	99	(29.2)	41	(27.7)
	保健婦・助産婦に相談	5	(4.0)	44	(13.0)	22	(14.9)
	知人に相談	1	(0.8)	0	(—)	5	(3.4)
	家族に相談	5	(4.0)	28	(8.3)	15	(10.1)
その他	3	(2.4)	3	(0.9)	1	(0.7)	

第8表に示す如く地域により学歴に差がある。大学卒業者は愛育群が最も多く49.6%、次いで渋谷群16.7%、川崎群が最も少なく4.4%にすぎない。逆に義務教育のみで終了したものが川崎群45.6%で最も多く愛育群7.3%と最も少ない。ここでいう大学卒には4年制大学及び短大卒業者で、高等学校卒業後看護学院、栄養士及び保姆養成所を終了したのも大学卒として扱った。

(2) 乳児の栄養法

第9表に学歴別の栄養法を示した。各学歴群とも人工栄養群が最も多く、大学卒群にやや多い傾向にある。母乳栄養群は中学卒群にやや多く大学卒群が最も少ないが有意差ではない。栄養法の選択にあたって相談を誰にしたか否かについて第10表に示した。各群とも「自分の考え」でしているものが最も多いが、学歴により差がみられる。すなわち、大学卒群60.4%、高校卒群46.6%、中学卒群40.8% (0.01 < P < 0.05) である。他人に相談したもののうち各群とも「医師」に相談したものの割合が最も多いが、「保健婦または助産婦」を相談相手に選

んでいるものは大学卒群には少なく、「知人」または「家族」に相談したものは中学卒群に多い。

(3) 児の体格の評価

各自の児の体格についてどのように評価をしているかを第11表に示した。「普通」と答えたものが最も多く、次いで「大きい」という判断をしている。母の評価と実測との相違は、「大きい」と評価している群に不一致率が高く、学歴群別では大学卒群の「大きい」と評価しているものが最も不一致率が高い。

(4) 育児書について

育児書を所有している母は、大学卒群92.5%で最も多く、高校卒群74.0%、中学卒群52.3%と続いている。この結果は第12表に示した。育児書の利害については第13表に示したが、約9割の母が有益と解答している。学歴別では中学卒群の母に「役に立たぬ」と答えている割合がやや多いようである。育児書の選択と入手時期についての成績を第14表に掲げた。選択にあたって他人に意見を求めているものが約3割いるが、愛育群は一般に他人

高野・佐久間：育児に関する調査

第11表 乳児の体格の評価

	学 歴	大 き い	普 通	小 さ い	計
澁 谷	大 学 校 高 中 学	人 25 (44.6)	27 (48.3)	4 (7.1)	56 (100.0)
		70 (35.0)	110 (55.0)	20 (10.0)	200 (100.0)
		26 (36.6)	41 (57.8)	4 (5.6)	71 (100.0)
川 崎	大 学 校 高 中 学	5 (55.6)	2 (22.2)	2 (20.2)	9 (100.0)
		49 (48.5)	44 (43.6)	8 (7.9)	101 (100.0)
		25 (27.2)	55 (59.8)	12 (13.0)	92 (100.0)
愛 育	大 学 校 高 中 学	21 (32.3)	35 (53.9)	9 (13.8)	65 (100.0)
		27 (47.3)	23 (40.4)	7 (12.2)	57 (100.0)
		2 (20.0)	4 (40.0)	4 (40.0)	10 (100.0)
計	大 学 校 高 中 学	51 (39.2)	64 (49.3)	15 (11.5)	130 (100.0)
		146 (40.7)	177 (49.5)	35 (9.8)	358 (100.0)
		53 (30.6)	100 (57.8)	20 (11.6)	173 (100.0)

第12表 育児書 の 普 及

	学 歴	有	無	計
澁 谷	大 学 校 高 中 学 計	人 50 (89.3)	6 (10.7)	56 (100.0)
		152 (74.5)	52 (25.5)	204 (100.0)
		43 (59.6)	29 (40.6)	72 (100.0)
		245 (73.6)	87 (26.4)	332 (100.0)
川 崎	大 学 校 高 中 学 計	9 (100.0)	0 (—)	9 (100.0)
		71 (69.6)	31 (30.4)	102 (100.0)
		43 (45.7)	51 (54.3)	94 (100.0)
		123 (60.6)	82 (40.0)	205 (100.0)
愛 育	大 学 校 高 中 学 計	64 (94.1)	4 (5.9)	68 (100.0)
		47 (79.7)	12 (20.3)	59 (100.0)
		6 (60.0)	4 (40.0)	10 (100.0)
		117 (85.4)	20 (14.6)	137 (100.0)
計	大 学 校 高 中 学 計	123 (92.5)	10 (7.5)	133 (100.0)
		270 (74.0)	95 (26.0)	365 (100.0)
		92 (52.3)	84 (47.7)	176 (100.0)
		485 (72.2)	189 (28.0)	674 (100.0)

に選択してもらっているものが多い傾向にある。出産前か出産後に分けて育児書の入手時期について調べたところ、各学歴群ともに出産前に既に持っているものが多い結果がでた。

(6) 年寄との同居について

対象のうち核家族のものに対して、「育児のために年寄との同居を希望するか」と質問したところ、第15表に示すような結果がでた。すなわち、「希望しない」と答えたものは各学歴群とも半数以上を占め、特に大学卒群では著明で73.2%のものが同居を望んでいない。

IV 考 按

育児の概要はいつの世においても不変のものであろう

が、最近では育児の目標がはっきりしないといわれてい

第13表 育児書 の 利害

	学 歴		有 益		無 益		計	
			人	%				
渋 谷	大 学 校 学 中	48	(96.0)	2	( 4.0)	50	(100.0)	
		145	(95.0)	7	( 4.6)	152	(100.0)	
		40	(93.0)	3	( 7.0)	43	(100.0)	
川 崎	大 学 校 学 中	9	(100.0)	0	( 一)	9	(100.0)	
		65	(95.6)	3	(14.4)	68	(100.0)	
		31	(88.6)	4	(11.4)	35	(100.0)	
愛 育	大 学 校 学 中	55	(85.9)	9	(14.1)	64	(100.0)	
		23	(88.5)	3	(11.5)	26	(100.0)	
		4	(66.7)	2	(33.3)	6	(100.0)	
計	大 学 校 学 中	112	(91.1)	11	( 8.9)	123	(100.0)	
		233	(94.7)	13	( 5.3)	246	(100.0)	
		75	(89.3)	9	(10.7)	84	(100.0)	

第14表 育児書 の 選 択 と 時 期

	学 歴	選 択			時 期		
		本 人	他 人	計	出 産 前	出 産 後	計
渋 谷	大 学 校 学 中	37(74.0)	13(26.0)	50(100.0)	31(62.0)	19(38.0)	50(100.0)
		108(71.1)	44(28.9)	152(100.0)	114(75.0)	38(25.0)	152(100.0)
		28(68.3)	13(31.7)	41(100.0)	31(72.0)	12(28.0)	43(100.0)
川 崎	大 学 校 学 中	5(62.5)	3(37.5)	8(100.0)	7(87.5)	1(12.5)	8(100.0)
		45(67.2)	22(32.8)	67(100.0)	43(65.2)	23(34.8)	66(100.0)
		26(66.7)	13(33.3)	39(100.0)	26(66.7)	13(33.3)	39(100.0)
愛 育	大 学 校 学 中	34(53.1)	30(46.9)	64(100.0)	44(68.8)	20(31.2)	64(100.0)
		25(53.2)	22(46.8)	47(100.0)	31(66.0)	16(34.0)	47(100.0)
		2(33.3)	4(66.7)	6(100.0)	3(50.0)	3(50.0)	6(100.0)
計	大 学 校 学 中	76(62.3)	46(37.7)	122(100.0)	82(67.2)	40(32.8)	122(100.0)
		178(66.9)	88(33.1)	266(100.0)	188(70.9)	77(29.1)	265(100.0)
		56(65.1)	30(34.9)	86(100.0)	60(68.2)	28(31.8)	88(100.0)

る。第二次世界大戦前や大戦中においては、官民ともに富国強兵の策に向って突進しており、育児も強い兵、強い労働力となるように目標がおかれた。戦後は育児といえば技術的なことばかりを大切にしており、如何に育てどのような人格の人間にするか、ということは余り大切なことではないのかもしれない。戦後の出生率は、いわゆるベビーブームといわれた昭和22~25年をピークに次第に減少し、一家庭の児童数は1969年には1.8人という数にまでなり、家族計画の普及が徹底したことを示しており、この結果から現代は少数精鋭主義の育児の時代といわれる理由はここにありそうである。松島<sup>4)</sup>が指摘する

ように、現代日本の育児は「厳格な育児」対「寛容の育児」の争いなのか、育児において社会風潮と同じく混迷を続けているそうである。そしてわが国の育児は国際的にみた場合、落第点をつけられてしまうと述べているNews Week 誌の記事を紹介している。母性喪失事件という言葉が使われるくらいに最近では母がこどもを育てるうえに問題を起す事件が頻発している。自分の都合がまず第一で、こどものことは二の次という若い母親——おむつ交換よりデパートで買物、泣いたからといってふとんむしにしてしまうような母——が多くなっている。このような母が自分本意に考えるようになった事件は以



高野・佐久間：育児に関する調査

第15表 年寄との同居希望

	学 歴	希 望 す る	希 望 し な い	計
澁 谷	大 学 校 学	13 (33.4)	26 (66.7)	39 (100.0)
	高 中 学 校 学	67 (47.9)	73 (52.1)	140 (100.0)
	中 学 校 学	30 (62.5)	18 (37.5)	48 (100.0)
川 崎	大 学 校 学	2 (40.0)	3 (60.0)	5 (100.0)
	高 中 学 校 学	32 (41.6)	45 (58.4)	77 (100.0)
	中 学 校 学	30 (41.1)	43 (58.9)	73 (100.0)
愛 育	大 学 校 学	11 (20.8)	42 (79.2)	53 (100.0)
	高 中 学 校 学	16 (43.2)	21 (56.8)	37 (100.0)
	中 学 校 学	4 (50.0)	4 (50.0)	8 (100.0)
計	大 学 校 学	26 (26.8)	71 (73.2)	97 (100.0)
	高 中 学 校 学	115 (45.3)	139 (54.7)	254 (100.0)
	中 学 校 学	64 (49.6)	65 (50.4)	129 (100.0)

前にはみられなかったというのが大方の一致した意見である。このように変動しやすい現代の育児環境を十分に把握するために今回は調査をしたわけである。

母の年齢分布、学歴分布をみても地域により、対象のとらえ方により非常に差のあることがわかり、それからも保健指導の規格品はとうてい無理であることが理解できる。

母乳栄養が減少していることは東京都の調査、厚生省調査をみてもわかる。昭和45年調査成績<sup>6)</sup>によると母乳栄養は28%という率にしかすぎず、昭和25年当時の70%と比較してその差の大きさに驚く。愛育病院のように母乳の良さを十分に徹底的に母親学級や退院指導などで教えられ、更に新生児室では可能な限り母乳のみで栄養しているのにも拘らず他の地区と大差のない結果しか愛育群から得られなかった。このことについてかつて同病院新生児室の担当者として従事していた際に、退院時に母親に指導をした経験者の一人として責任を感じるとともに、母親が人工乳を安易に使い母乳を与えようとする努力をしていないことを痛感する。宮崎<sup>7)</sup>がいう如く新生児期の母乳栄養の確立が後日の栄養にはっきりと影響することがわかっているが、施設分娩が増えたことはよいことであるが、そのためにかえって母乳栄養が減少したといわれる。最近では安易に人工乳が人手できることから、また母親、助産婦、保健婦ばかりでなく医師までが人工栄養の効果を過大評価している傾向にあることは否定できない事実のようである。母乳栄養減少の原因の一つといわれる「勤労婦人の増加」について今回の対象群で比較した場合、渋谷群9.0%、川崎群7.6%、愛育群12.4%となっているが栄養法の差は三群間にはないことは先述の

とおりである。この対象群に「乳児の栄養法として何が理想的か」と質問したが、「母乳栄養である」と答えたものが渋谷群37.4%、川崎群82.0%、愛育群90.1%でほとんど差がない。学歴別、年齢別にみても差がなく、概念においては母乳栄養の重要性や良さを知っているが実際にはなかなか行なわれないのが現実であろう。そこにはやはり充分な教育が必要になってくる。

育児知識を得る源の一つとして育児書の普及とその利用について調べた。昭和44年に育児書といわれる出版物は68種類あったといわれている<sup>7)</sup>が、この出版状況からみて育児書の人気は大きいものであることがわかる。大塚<sup>8)</sup>の調査によると育児知識を育児書から得たというのが21%位あり、育児経験者から得たという24.3%に匹敵する。これからみても育児書は教科書なみの必需品であるという羽室<sup>7)</sup>の指摘があてはまる。学歴別にみるとその所有率に差がみられるのは興味深い。育児書の利害は非常に大きいものであり、育児書に書いてあるのと同じように育児がなされた場合（想像できないが）にはJISマーク入の規格品の日本人ができていくのではないかとさえ思われる。しかし、こどもは育児書どおりにはいかぬもので、そこに育児ノイローゼの母を作られる基にもなっている。今回の調査対象の95%は育児書は「役に立つ」と答えている。育児書は育児経験者、医師保健婦の代理をつとめている感が強い。しかし、学歴別にみると、中学卒群では「役に立つ」と答えている率が他の学歴群より低い。この結果からみて、育児書の読み方、利用の方法を大きな問題として考えてみる必要がある。書物を読むという習慣、熱意、関心とともに読んだものの理解力がこの結果になったものとも考えられる。

学歴の低いものでは一般にいわれる「井戸端会議」を重要視し、近所の人があいつたから、あの人がこういったからという俗説にまどわされる傾向が強い。ここにも正しい衛生教育が必要なことがわかる。

核家族であることが育児にとって有利なのか不利か、これには意見のわかれるところであろう。大塚<sup>8)</sup>の調査からみても、育児知識の導入源としての育児経験者の必要性は育児書のと大差はないように思われる。核家族の母にとって身近かに育児経験者がいないので、その代用品としての育児書の普及があり、テレビやラジオの

育児番組などがある。都会においては育児に関する情報は豊富に得られるので、育児経験者としての年寄りとの同居が不必要であるのかもしれない、年寄りも若い母との意見の衝突を避けているような感じを受けないでもない。現在は核家族が全国で54%、調査対象では70~88%であるという過渡期であるから、「核家族だから」と強調しているが、近い将来特に都会においては保健指導は自然の形で核家族を対象に行うように移行しているものと想像される。

## V 結 語

大都会の対照的な二地区と一貫した保健指導を受けている母を対象に育児に関する調査をした。

同じ都会といわれる地域でもその住民には非常に差があり、また年齢及び学歴によっても差があるので、保健指導の方法にも更に工夫を持ち、地域保健活動の最先端となる保健所の業務の拡充と改革、更に医師及び小児保健従事者の地域社会へのより多いアプローチが望まれるとともに、国家の母子保健対策の拡充を願ってやまぬ。稿を終るにあたり、この調査に協力を頂いた東京都渋谷保健所、川崎市御幸保健所の職員各位に謝意を表します。

### 〔文 献〕

1) 厚生省児童家庭局：全国児童家庭調査結果(抄)昭和44年度、小児保健研究29(1)36~39、1970

- 2) 高野陽、佐久間治子、藤村京子：大都会の母親の育児態度に関する調査、第1報地域別にみた育児環境、日本総合愛育研究所紀要第6集85~93、1971
- 3) 東京都衛生局：昭和43年度における東京都乳幼児発育状況調査成績17~20、1970
- 4) 松島富之助：育児思想の変遷、小児科診療33(1)49~59、1970
- 5) 厚生省児童家庭局母子衛生課：昭昭45年乳幼児身体発育調査結果報告書、母子衛生研究会、1971
- 6) 宮崎叶、高橋悦二郎、川面美智：新生児栄養の実態、小児科臨床17(8)993~998、1964
- 7) 羽室俊子：育児相談と育児書、保健の科学13(1)41~44、1971
- 8) 大塚昭二：育児相談の要諦——養護——、小児科臨床21(7)833~835、1968

Investigation into Upbringing of Children (2)  
—The Relation between Upbringing and Mother's Age and  
Academic Career—

Dept. 2 Akira Takano  
Haruko Sakuma

We inquired, by questionnaire method, the mothers who had the first child of 3 months old in such big cities as Tokyo, Kawasaki, etc. of their upbringing practices to investigate what influence the environment of a city is exerting upon upbringing of children, and how mothers are thinking of their own health and of their children's in this bustling social condition, classifying mother's age and academic career.

As to nourishment, the number of breast feeding is less while that of bottle feeding is large regardless of mother's age and academic career. However, mothers of all ages and academic careers know that breast feeding is the best nourishment.

More young mothers have the books on child rearing, and the rate of having such books is low with the mothers above 30 years old. Examining it by academic career, the rate of having the books is high with the mothers graduated from universities and low with the mothers finished lower secondary schools. Many mothers who finished lower secondary schools state that the books on child rearing are not quite useful for them.

More than 70% of the subjects are the mothers of nuclear families, which rate is higher than the average of the whole country. The replies to the inquiry whether these mothers want to live with older women having experiences in child rearing for their own upbringing practices or not indicate that the number of mothers who want to live together is small, especially the rate of not wishing to live together is high with the mothers who graduated from universities.

Thus, in big cities a great difference is seen in the environment of bringing up children depending upon the living place, mother's age and academic career, which fact explains that uniform health guidance is quite unsatisfactory in big cities.